

第7回

羊蹄まちしるべ地域ガイド育成検定試験／基礎講座

【問題】

平成25年7月

注意

1. 開始の合図があるまでは、開かないでください。
2. 開始後30分が過ぎる前に会場を退出することはできません。

次の1から11までのテーマに関する文章をよんで、問【1】～問【49】の設問に該当する答をひとつだけ選んで○をつけてください。1問だけ、記述回答があります。設問と回答は別紙となっています。

1：「羊蹄山」山名の起源

私たちにはなじみが深く、親しみを込めて「蝦夷富士」と呼ぶことも多い「羊蹄山」ですが、明治時代から太平洋戦争が終わるまでは「後方羊蹄山」と記され、「【1】」と読まれていました。知らないと読めないとても難しい名称ですが、「羊蹄」は薬草の一種で漢名では「【2】」と読みます。和名では、「羊蹄」と言う漢字2字に「し」と短縮された読みが与えられました。牧野富太郎著『植物随想』にも、そのことが紹介されています。

この「後方羊蹄」という地名が始めて登場した史書は、『【3】』です。この中に、659年（斉明5年）、【4】が百八十艘の軍船を率いて北征し「後方羊蹄」に拠点を構えたところ、二人の蝦夷から「後方羊蹄に統治の拠点を置くのがよいのではないか」と進言があり、ここに政所を置いた、と記されています。この『【3】』の記述がきっかけとなって、「後方羊蹄」とはどこを指すのか、多くの史家や探検家たちの想像力をかきたててきました。

「後方羊蹄」とはどこか、については諸説あり、喜茂別、倶知安、余市などにも、由来が語られています。そのひとつ喜茂別の留産原野については、河合篤叙がこの地こそ「後方羊蹄」と信じ、地元住民らと共に【4】を神として祀る【5】神社を創建し、今日まで地域住民がこれを祀ってきました。また、倶知安神社も【4】を神として合祀しています。

2：「羊蹄山」山名の変遷

「後方羊蹄山」と尻別岳は、ともに尻別川流域に並ぶ山で、喜茂別の双葉方面から眺めると山の姿もよく似ていますが、明治以前に蝦夷（北海道）を訪れた和人の記録の中では、この両者はしばしば取り違えられています。“尻別川の地こそが「後方羊蹄」である”と記したのは新井白石の『蝦夷志』ですが、「後方羊蹄」と「尻別」の発音（読み方）が近いこともあって、その後もさまざまな混乱が続きます。江戸時代に蝦夷地を探検した人が描いた多くの古地図では、羊蹄山を「後方羊蹄」の山と表記している事例は少なく、むしろ「尻別」の山と記した例の方がはるかに多かったのです。

一方アイヌの人たちは、羊蹄山をマチネシリ（女である山、雌岳）、尻別岳をピンネシリ（男である山、雄岳）と区別して呼んでいました。また、羊蹄山は別名「【6】」とも言われていました。

ところで、江戸時代に北海道の輪郭と内陸の河川を初めてほぼ正確に描いた測量家間宮林蔵は、この山を「【6】」と記しましたが、この地図を引きうつしてさらに河川など地名を詳細に書き加えた松浦武四郎は、「後方羊蹄山」と記しています。二人の考え方の違いがうかがえる、興味深いエピソードと言えます。

明治維新後、政府はロシアの南下政策に対抗するため、北海道（蝦夷）が古来より日本の領土であったことを示すために、阿部比羅夫が軍を駐留させた「後方羊蹄」の名を冠した山として「後方羊蹄山」を公式な名称に採用します。しかし、近代的な測量技術に基づく20万分の一地形図を作成した【7】には、明治政府内でも【6】と表記されたり、明治30年代から急増した入植者たちによる「蝦夷富士」という名称も広く使われたことから、太平洋戦争が終わるまで、これら3つの名称が混在して使われていました。

太平洋戦争が終わり、北海道を日本の領土として主張するために「後方羊蹄山」を敢えて持ち出す必要性が薄らいだこともあって、「後方羊蹄山」の読み方が難しいなどの理由から、地元自治体【8】からの要望もあって、政府も方針を変え、昭和40年代の地形図からは「羊蹄山（蝦夷富士）」と記されるようになりました。

3：羊蹄山観光開発の始まり

羊蹄山麓における観光の歴史にとって、【9】は重要な年となりました。この年、大量輸送が可能な公共交通機関【10】が小樽から倶知安を通過して函館まで全線開通しました。それにともなって、地元の駅名をどうするか大きな関心事となりました。倶知安では、尻別川が大きく蛇行するひらふ地区に作られた【11】駅を【5】駅と改名し、旅行者の関心をこの地にひきつけ、観光産業を興そうという活動を始めました。

この動きの中心にあったのが、河合篤叙を会長とした【12】です。彼らは、旅行者の関心を羊蹄山に誘うため、【5】駅から羊蹄山頂に至る登山路を開削します。この倶知安コースは、羊蹄山の【13】番目の登山路です。また、登山路の途中には後方羊蹄神社を開山し、【5】伝説を大いに活用した観光開発を推進しました。河合篤叙が倶知安コース登山路の途中に後方羊蹄神社を開山したのは、喜茂別に【4】の名前を冠した神社を創建したのと同じ大正2年でした。今日国際的なリゾートとして賑わっているひらふ地区が、この地域の観光の出発点であったことは興味深い歴史のエピソードですが、当初、仰ぎ見る山であった羊蹄山への登山をアピールした観光戦略は、この後、温泉とスキーによるニセコ山系の観光開発へと大きく展開していきます。

4：羊蹄山は二重構造の火山

羊蹄山は単独峰のコニーデ型火山ですが、同じ姿形の富士山同様、シンプルな山容にもかかわらず、内部は複雑な構造となっています。羊蹄山が形成されたのはおよそ2万6千年前からですので、比較的新しい火山と言えます。羊蹄山の生成は【14】の形成から始まりますが、これはおよそ1,000メートル級の火山です。これを覆い隠すように、【14】の東側に新しい火口ができて本体火山が形成されますが、その噴火の過程で噴出した大量の溶岩が西側の【14】にも堆積し、西側に大きく膨らんだ今の形ができます。【15】側から見るとそのふくらみ具合が顕著にわかります。

羊蹄山の頂上には、真ん中の大きな父釜（噴火口、カルデラ）の西側に小さな母釜と子釜があることが、この山の形成過程を物語っています。3つの釜のうち、最も古い釜は子釜、次に母釜、そして最後にできた窯が父釜です。古い釜ほど、その後すぐそばで噴火した新たな釜によって一部が埋められて釜が小さくなったのです。

また、山肌を見ると、谷筋が急に曲がったり分岐したりしているところが、ほぼ同じ標高位置に見られますが、これは【16】と言われます。その地点で基盤岩が異なっているために、山肌を流れ落ちる雨水の道が大きく曲がることによって形成された地形ですが、羊蹄山の場合、この【16】を横につなげると、山が三つに水平区分されます。山頂に噴火口が三つあることと合わせて、羊蹄山の形成史を知ることができるのです。

単独峰である羊蹄山は、生物生息環境の垂直分布がわかりやすい山です。中腹以上に分布する高山植物群は国の天然記念物にも指定され、特に頂上付近には氷河期の生き残りと言われるダイセツオサムシなども生息し、ニセコ山系とは生態系が大きく異なっています。

羊蹄山は、5つ【17】の自治体が頂上の1点で接するように行政区分されており、平成2年に確定された標高は、最も高い喜茂別ピークで【18】メートルです。

5：レルヒ中佐のスキー登山

世界各国の予想に反して日露戦争に勝利した日本は、いっそうの軍事強化の道を歩みました。その一環として、欧米各国の軍事ノウハウの導入を進めるために招いたのが、【19】軍人テオドール・フォン・レルヒ少佐です。彼は、明治44年に来日して富士山への初登頂を目指しながらも失敗したことから、翌明治45年に旭川の第7師団に異動となったのをきっかけに、早速、羊蹄山へのスキー登山を敢行します。スキー登山に先立って、レルヒは倶知安町旭が丘公園の小高い山で、地域住民に一本杖スキー術を披露していますが、これがこの地域でのスキー普及に大きな影響を与えました。

羊蹄山へのスキー登山は、第7師団の若手将校や、ガイドとして【12】を伴い行われ、吹雪の中で山頂をきわめました。その様子は、【20】の報道によって全国に発信され、脚光を浴びました。今日ではスキーはニセコ山系で隆盛を極めていますが、その源流はレルヒ中佐による軍事訓練としての羊蹄山スキー登山だったのです。

第7師団の将校たちは、そのスキー術を北大（当時は農科大学）の学生に伝授し、北大学生スキー部はその後、【21】不老閣で毎年合宿を重ね、小樽高商スキー部と共に、ニセコ山系におけるスキーの歴史に大きな足跡を残しました。レルヒ中佐の像は倶知安町にあります。

6：「ニセコ」の名称にまつわる歴史の謎

全国的に有名な地域ブランドとなった「ニセコ」はニセコアンヌプリの略称で、ニセコアンベツ（川）が地名の起源ですが、ニセコアンヌプリは、山容のイメージとは異なる、

「【22】」という意味を持っています。この地名も不思議ですが、明治20年代以前の地図には、その隣の山イワオヌプリは名称が載っていても、ニセコ山系の主峰ニセコアンヌプリの名称は載っていないのです。この謎は、「ニセコ」がかつてどのような地域であったのかを物語っています。つまり、イワオヌプリやニセコアンヌプリそしてチセヌプリは、いずれも明治以前から【23】の採掘現場でしたので、一帯を総称して「【23】山」と呼称し、最も標高が高く景観としても目立ったはずのニセコアンヌプリには、明治20年代まで「【23】山」以外の固有の名称が付かなかったのです。【23】の採掘は、江戸時代の末期には小規模とは言え既に行われていましたが、明治政府も大きな関心を寄せ、地質学者の【24】も地質調査を行っています。明治10年代には、伊達紋別の永年社が採掘を続け、その後【25】が近代的な採掘精製法に変えながらも、【23】の採掘は昭和12年まで続けられ、地域の歴史に大きな影響を与えました。【26】山麓の【23】の採掘跡は、倶知安町の産業遺産に指定され、いまでもその繁栄の跡を偲ぶことができます。

【26】の周辺は、【23】の影響で植生の垂直分布に乱れが生じているところがあります。羊蹄山のきれいな垂直分布とは異なる複雑な植生分布が、ニセコ山系生態系の大きな特徴のひとつです。

7：温泉とスキーが創った「ニセコ」ブランド

ニセコ・羊蹄山麓の温泉は、明治18年に間欠泉が発見された馬場温泉（後の湯本温泉）が最も古く、この温泉が、昭和の初期に秩父宮がスキーで遭難騒動を引き起こしたときの避難場所となったことにも象徴されるように、スキーと結びついて発展しました。また、温泉とスキーとの結びつきは、明治30年に開業した山田温泉の周辺にその後【27】が開設されるなど、ニセコ山系における温泉とスキーの結びつきは、次第に歴史の表舞台へと押し出されていきました。

その後、鉄道がこの地に敷設されたこの年、地域における観光戦略の一端として、【21】が開業します。今は存在しない温泉ですが、昆布温泉郷を代表する温泉の一つでした。鉄道の乗客が温泉に関心を持たないはずはなく、この頃から周辺にはさまざまな温泉が開業します。【21】では北大学生スキー部が毎年合宿し、同じ昆布温泉郷の宮川温泉（現在の【28】）には小樽高商スキー部が合宿し、温泉とスキーの結びつきを深めます。

昭和3年、スイスの【29】で冬季オリンピックが開かれ、日本からもはじめてスキー選手が派遣されました。連日の報道により、日本国内でも【29】は耳馴染みになります。この冬季オリンピック終了直後、秩父宮さまが【21】の不老閣に宿泊してスキー登山に臨みますが、悪天候のため遭難騒ぎまで起きます。この一部始終が全国に報道されたことから、ニセコ山系の雪質が【29】にも劣らないパウダースノーであることが全国に知られ、「極東の【29】」として「ニセコ」の名が一気に全国区となったのでした。その後、【21】は大きな歴史的役割を終えるかのように、その華々しい歴史をひっそりと閉じたのです。

8：羊蹄山麓の湧水

羊蹄山の裾野には、湧水量の多い湧水地が【30】箇所以上あります。日本名水百選にも選ばれた【31】の湧水はその代表例で、観光地としても有名です。ほとんどの湧水は、標高【32】メートル前後にある火山岩と粘土層の境目から湧出していますので、羊蹄山を円のように囲んで分布しています。全体で1日に30万トンも湧出していますが、【31】など羊蹄山の南東半分6箇所で全体の70%を超えています。特に、【31】の湧水は、公式ホームページによると1日に【33】万トンも湧出しているので、計算上は1秒に1トン近い湧出量になります。このような湧出量の偏りは、羊蹄山の内部の地質構造が東西で対称となっていないことに原因があります。

火山山麓の湧水が美味しいのは、雨水などが地中を流下する際きれいにろ過され、カルシウムやマグネシウムなどのミネラルが適度に溶け込み、水温もほぼ【34】で一定するからです。この水質についても、羊蹄山の南東部と北西部では違いが見られます。水量が多い南東部では北西部より地中の流下速度が速く、結果的にミネラルの成分がやや薄くなり、湧水はそれぞれで異なる個性的な味わいとなっています。羊蹄山麓の5町村では、この湧水を水道水源として用い、全世帯に美味しい飲料水を届けています。また、湧出量の多い町村では、湧水を用いて、様々な商品を開発し販売しています。

9：松浦武四郎による尻別川の踏査

蝦夷地を生涯で6回探検した松浦武四郎が江戸幕府の役人に任ぜられたのは、安政3年のこと。翌安政4年、彼は幕府の命により尻別川の探索を行います。最初は、春、尻別川河口の蘭越の磯谷から川を遡りますが、「ブイラ」と呼ばれる激流ポイントに阻まれ、目名地区（蘭越町）のあたりで遡上を断念します。直後の二度目は、支流ソースケ川沿いに尻別川に入りますが、これも激流ポイントに阻まれて上流にも下流にも行けませんでした。結局、同年の夏、虻田から留寿都を通りぬけて、【35】の相川地区あたりで尻別川に入り、そこから尻別川の上流に向けて遡り、鈴川地区のあたりで引き返して川を下りました。途中激流ポイントを何箇所も超えて、やっと河口にたどり着きました。途中の各地で、アイヌのサケ漁に圧迫を加える和人の不法な漁を見かけたり、アイヌからその対策を依頼されたりしたことも、幕府に報告しています。

蝦夷地におけるアイヌの生活や文化に敬意を払っていた松浦武四郎は、後の明治2年、開拓使の命により蝦夷地に新たな名称を付ける際、「北加伊道」を提案しています。開拓使は、それを「北海道」に変えて採用しますが、武四郎は「加伊」の二文字に深い想いを託したのです。「カイ」という語は、アイヌ語で「自分たちの故郷」を指す言葉であることから、この地がアイヌの故郷であることを記憶にとどめたいという武四郎の想いが託されていたと考えられます。

翌安政5年、武四郎は再び虻田から【35】の相川地区あたりに向います。今度は尻別川の支流喜茂別川を遡り、中山峠を越えて石狩に抜けます。このときのルートはその後、明

治3~4年にかけて開削された【36】の基となり、今日の国道230号に結実します。

この2回の調査結果は、公式の報告書として幕府に提出されましたが、幕府によって公開が禁止された【37】ことから、武四郎はその内容を一般に広めるため『後方羊蹄日誌』を著します。この中で、登山家であった武四郎は後方羊蹄山に登ったと記していますが、最近の研究でこれはフィクションであることがほぼ確実となっています。北海道の自然と後方羊蹄山の素晴らしさを多くの人に伝えたいという、武四郎の想いが表れているエピソードと言えるでしょう。

10：尻別川流域の生活圏と川利用のルール

尻別川は流路延長129キロメートルで、流域自治体は後志支庁管内の7町村をあわせて全【38】市町村、源流となる山は【39】です。多くの支流がありますが、羊蹄山の南側を巻き込むように流れるのは【40】です。武四郎が描いた古地図には、この【40】も羊蹄山の北側を流れているように誤って描かれています。間宮林蔵の正しい地図を引き写す際、何らかの原因で間違ったのでしょう。

農業用水や発電用のダムが尻別川本流には【41】箇所あります。その全てに魚道が設置されるようになったのはこの約10年間のことです。しかし、この魚道は、流域最大の淡水魚【42】などは遡上できません。河口付近ではヤツメウナギなどの内水面漁業も盛んで、近年は【43】などの新しいアクティビティが大勢の観光客を集め、冬のスキーと並ぶ夏の観光産業として隆盛を極めるようになりました。このように、川の多様な利用形態が混在するようになったことから、それぞれの利害や利用方法の調整を図るため、NPOなど住民が中心になって、2000年にそれぞれの利害を調整して川利用のルールを作りました。

また、川利用のルールに公的な強制力をもたせるため、流域【44】町村が広域で「尻別川統一条例」を制定し、尻別川の恵みを後世に伝えるべく努力しています。平成23年度には、生物多様性の観点から河川生態系の頂点に立つ【42】など希少種の保護を謳った統一条例の改正が行われました。【42】の自然産卵も平成22年度から回復し、また平成24年には、住民団体NGOが長年人工ふ化を行ってきた成果が現れ、始めて人工ふ化で成魚になった【42】による自然産卵も確認されました。

11：農と食

羊蹄山麓の農業は畑作が主体ですが、水田も有力なブランドを形成しています。地域の名前が農作物の名称としてブランド化した【45】の米、日本一の生産量を誇る【46】のユリ根、かつては生産量が日本一だった喜茂別の【47】などが代表的な農作物です。しかし、この地域のもっとも大きな特徴となるブランド農作物はジャガイモでしょう。

明治初期にさまざまな品種のジャガイモが導入され品種改良も行われ、大正末期には【48】がこの地域の代表的な品種に育ちました。昭和10年代には、留寿都村でデンプン用の

新品種紅丸が開発され、羊蹄山麓はジャガイモの一大生産地となりました。ところが、収益性の高いジャガイモは連作になりがちで、昭和40年代には日本で始めて、羊蹄山麓で【49】による被害が発生し、深刻な事態となりました。【49】は、南米ペルーで発生し、世界中に蔓延した寄生虫です。しかしその後、輪作体系の徹底とジャガイモの抵抗品種の開発により、【49】はほぼ克服されています。抵抗品種の中でも留寿都村の農家はその普及に努力したキタアカリは、調理のしやすさや食味の点でも消費者に歓迎されています。このように、輪作と抵抗品種の組み合わせによって、羊蹄山麓の各町村はそれぞれが個性的で多様なジャガイモ産地を形成しているのです。

問題は以上です。おつかれさまでした。